

## 小学校「外国語活動」での絵本活用の留意点：*Hi, friends!* を例に *Using Picturebooks in English Classes in Elementary Schools: A Case Study on Hi, friends!*

早川 知江 Chie HAYAKAWA  
(美術学部教養部会)

### 0. はじめに

本稿は、小学校第5～6学年で実施されている「外国語活動」で利用するための効果的な教材や活動を、言語理論の枠組みから検討し、提案しようとする研究の一環である。

外国語活動の目的は、「コミュニケーション能力の素地を養う」(文部科学省 2008) ことである。中学からの英語教育で本格的に導入され、ある程度暗記も求められる様々な英語表現は、この目的の中にどう位置づけるべきなのだろうか。本稿は、このコミュニケーション能力重視の観点から、表現の「形」を練習させることを中心とした従来型の教材にプラスして、絵本を教材として併用し、実際のコミュニケーションの場で用いる「道具」として英語表現に慣れ親しませることを提案する。その一例として、文部科学省が編纂する外国語活動用教材 *Hi, friends! 1, 2* の中で、絵本がどの程度効果的に用いられているか分析し、そこから、より効果的に絵本を用いるにはどのような留意点が必要かを検討する。

第1節では、文部科学省による学習指導要領を見ながら、外国語活動の目的は何か、コミュニケーション主体の授業とは何かを確認する。その中で、「コミュニケーション能力の素地を養う」ことを目的として編纂されたはずの *Hi, friends!* が、必ずしもその目的に適っていない可能性を示唆する。

第2節では、そうした既存教材の不足点を補うため、絵本を活用することで、児童が実際のコミュニケーションの場での言語使用を(仮想)体験できるという利点を論ずる。その際、様々な第二言語学習仮説や教育現場での体験談に基づき、外国語活動に利用する絵本の条件として、次の二つを提案する：

- 条件 1. 使用される英語が、これまでに学んだ表現を多く取り入れていること
- 条件 2. 英語だけで話が理解できること

続く第3節は分析部で、*Hi, friends!* の中で、絵本が教材として有効に利用されているかを検討する。分析するのは、*Hi, friends! 2 Lesson 7* で導入されている「桃太郎」の英語版絵本である。この絵本が、上記の2条件をどの程度満たしているか分析し、その上で、より教材としてふさわしい絵本とはどのようなものかを検討する。

## 1. コミュニケーション主体の授業とは

2011 年度より実施されている小学校学習指導要領 (2008 年 3 月改訂) に基づき、公立小学校第 5 ～ 6 学年において必修化された外国語活動の目標は、次のとおりである (文部科学省 2008) :

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

ここに明らかなように、外国語活動のキーワードは「コミュニケーション」に尽きる。「コミュニケーションを図ろうとする態度」を育成し、「コミュニケーション能力の素地」を養うのが外国語活動の主目的であり、中学の英語の授業で本格的に学び始める様々な表現は、暗記することではなく、あくまで「コミュニケーション能力の素地」を養うために「慣れ親しむ」ことが求められるのみである。

では、実際に外国語活動で用いられている教材は、この目的に適っているだろうか。この議論に先立ち、次節では、そもそもコミュニケーションを重視した活動とは何なのかをまとめたい。

### 1.1. やりとりする情報の「質」

そもそも、外国語活動の「授業」という作られた場で、どうすればコミュニケーション活動が成立するだろうか。外国語活動で (そして中・高の英語の授業で) 多く想定される活動としては、授業で習った表現を使ってクラスの友だちとやりとりをしてみよう、というものがある。しかし「やりとり」をしているからといって、それがコミュニケーションになっているとは限らない。やりとりがコミュニケーションとして成立するには、やりとりする情報の中身や、やりとりの必然性が重要になってくるからである。

直山 (2014) は、以下のような分かりやすい例を挙げることで、「現実のコミュニケーション」と「疑似的なコミュニケーション」を区別している :

コミュニケーション活動の重要なポイントは、受け渡す「情報の質」にある [中略]。例えば、「ミカン、リンゴ、バナナの果物 3 つから選んで質問に答えましょう」というペア活動で、“What fruit do you like?” “I like apples.” という会話をしたとする。そこでやりとりされる情報は、既に選択肢が限定されているので、あまり「知りたい情報」ではない。こうしたコミュニケーション活動は、現実のコミュニケーションとは異なり、疑似的なコミュニケーションといえるだろう。(p4)

引用部のような活動は、児童に質問と回答というやりとりをさせることでコミュニケーションを重視しているように見えて、実は “What ~ do you like?” という表現を身につけさせることを主眼としている。「~について知りたい」などの目的を達成するための「道具」として表現を用いるのがコミュニケーション本来のありようだが、ここでは、特定の

表現を身につけるために、児童が知りたいとも思っていない情報をわざわざ尋ねさせている。すなわち、表現練習のために目的を作っているという点で、表現と目的の優先性が逆転してしまっている。

こうした問題意識を踏まえ、直山（2014）は、本来のコミュニケーションに重要な要素は、「慣れ親しんだ表現を、自分が必要とする情報を得るために使うこと（p8）」だと述べている。つまり、コミュニケーション能力育成のためには、当然いくらかの基礎的表現を知らなければならないが、同時に、それらの表現を、実生活の中で何らかの目的を果たすために使ってみることが重要なのである。

こうした「慣れ親しんだ表現を、自分が必要とする情報を得るために使う」活動は、現在どの程度授業に取り入れられているだろうか。次節では、多くの小学校で用いられている教材が、目的と表現のどちらを優先して作成されているかを検討する。

## 1.2. 『英語ノート』 / *Hi, friends!* の問題点

代表的な外国語活動の教材としては、文部科学省が編纂した共通教材 *Hi, friends! 1, 2*（『英語ノート』の改訂版として2011年度から導入）がある。外国語活動は現在、教育課程上は教科でなく領域という扱いであるため、文部科学省検定済み教科書は存在せず、*Hi, friends!* も検定教科書ではないため、使用義務は課せられていない。しかし全国のほとんどの公立小学校で使用されており（樋口、他2013：42）、実質的に教科書の役割を果たしていると言ってよい。内容としては、各単元（*Hi, friends! 1* は Lesson 1～9、*Hi, friends! 2* は Lesson 1～8）ごとに「いろいろなものを数えよう」「友だちにインタビューしよう」などのトピックが設定され、そのトピックに関わる単語や表現を取り入れたリスニングやゲーム、歌やチャンツ、簡単なやりとり課題などで構成されている。

この *Hi, friends!* は、どの程度「コミュニケーション能力の素地を養う」という目的に適った内容になっているだろうか。外山、他（2010）は、*Hi, friends!* の前身であり、同じく文部科学省が編纂した外国語活動用教材『英語ノート』を、コミュニケーション重視の観点から検証し、結論として、「文部科学省が「英語活動」の目的としている「コミュニケーション能力の素地を養う」ことと、その実現のために文部科学省が作成した「英語ノート」の実態にはギャップがある（p36）」と明言している。その理由として、既に見た直山（2014）の例と同様、コミュニケーション活動を重視しているように見えて、実は言語表現を獲得するためにつくられた活動が主であることを指摘している：

例えば、『英語ノート1』レッスン4を見てみましょう。トピックは「自己紹介をしよう」ですが、4週にわたる指導案では、I like apples. を導入し、次に、Do you like apples? Yes, I do. No, I don't. の練習が続きます。これは、言語ベースの指導案です。

5年生の子どもが自己紹介をするとしたら、好きなものを紹介するだけではない

でしょう。言いたいことは食べ物やスポーツだけではありません [早川注：レッスン 4 では、Do you like ~? の ~ 部に当てはまる表現として、食べ物とスポーツを表す単語のみが紹介される]。また、学級の友だちは、小学校入学時から知っている子どもが多いのですから、バナナが好きかと質問し合うことが、コミュニケーションになるとは思えませんね。コミュニケーションとは、知ろうとすることです。既に知っていることを材料にして対話をするのは、コミュニケーション活動ではありません。(p36)

直山 (2014) が「疑似的コミュニケーション」という用語を用いたのに対し、外山、他 (2010) は「言語ベース」という用語を用いているが、要するに、目的よりも (言語) 表現を優先させるのはコミュニケーション活動ではない、という点で、両者の主張は重なるだろう。

上記の引用で外山、他が論じているのは『英語ノート』の問題点であるが、まったく同じ問題点が *Hi, friends!* にも引き継がれている。引用部で取り上げられた、「自己紹介をしよう」というトピックのもとに I like apples. という表現を練習させるレッスン 4 は、*Hi, friends!* 1 においては、Lesson 4 「好きなものを伝えよう」の単元に相当し、そこでもやはり、“I like apples.” “I don't like bananas.” “Do you like baseball?” “Yes, I do. / No, I don't.” の表現を繰り返し練習する活動が指導案の中心になっているからである。このように、外国語活動の教材として広く用いられている *Hi, friends!* も、目的より表現を重視する傾向は免れていないことが分かる。

もちろん、外国語の習得過程において、特定の表現を繰り返し練習して慣れ親しむのは不可欠な要素である。本稿は、こうした活動が不要だとか有害だとか主張するものではない。必要なのは、そうした活動を前提として、さらにそれらの表現を、英語を使用する必要性・必然性がある場面において「何かをするため」に用いる体験をプラスすることである。しかし、「英語を使用する必要性・必然性」のある場面を設定するのは、教育現場においてそれほど容易でない。この点を次節で検討する。

## 2. 絵本利用の可能性

### 2.1. 英語使用の必然性

前節まで、外国語によるコミュニケーション能力の育成には、その外国語を使用する必要性・必然性が不可欠ということを見た。では、児童にとって、英語を使用する必要性・必然性がある活動とはどのような活動だろうか。そもそも「授業」というのが作られた状況であることを踏まえると、厳密な意味での本物のコミュニケーションは、教室外の実生活にしかないともいえる。

しかし日本において、日常生活で英語を使用する必要性・必然性がある児童はほとんどいないのが現状である。世界的には、家庭で話される母語と、政治や公共の場で用いられ

る公用語が異なる国や地域が多数存在するのに対し、日本では、家庭、教育はもちろんのこと、普段目にする新聞・雑誌などの出版物、テレビ・ラジオなどの放送に至るまで、すべて日本語で事足りる。このことは、日本における外国語教育に関する文献でも頻繁に指摘される。例えば高島（2014：168-169）が、「アジアのEFL [早川注：English as a Foreign Language の略で、「第二言語としての英語」に対し、「外国語としての英語」を指す] 環境の国や地域は、教室外で英語を使う必要性は一般的に低い。[中略] 意識して英語のインプットを求めない限り、日常生活は母語だけで不自由がないのが現状である (p169)」と述べる通りである。

このように、教室外の英語使用の機会が少ないというのはすなわち、外国語活動で学んだ表現を、現実の社会的場面の中で使う機会が少ないことを意味する。そして、授業の中で児童に英語を使わせる活動は、どうしても意図的に作られた活動になりがちで、本来のコミュニケーションのありようからは離れてしまう。

## 2.2. 絵本利用の可能性

このように、英語で本物のコミュニケーションを体験する機会が少ない現状を補足するため、本稿は、外国語活動に英語の絵本読み聞かせを取り入れることを提案する。その理由は、絵本には、ここまで見てきた「目的のための表現使用」のありようを児童が（仮想的にはあるが）体験できるというメリットがあるからである。というのも、一つの物語がまるごと英語で提示される絵本は、児童がある程度の量の、しかも内容的にまとまりのある英語を聞くことで、「場面」の中での英語使用に触れられる活動だからである。

例えば、前節に見た “Do you like ~?” というフレーズも、ただその表現を覚えるだけ、あるいは、覚えた上で、わかりきった答えを引き出すために質問してみるだけ、というのではコミュニケーションにならない。しかし絵本ならば、その表現が実際に（登場人物どうしの）コミュニケーションの中で、様々な目的を達成するために用いられるさまを見ることができる。実例として、Judy Shcachner による絵本で、やんちゃな子猫 Skippyjon Jones（以下 Skippy）が活躍するシリーズの1冊、*Skippyjon Jones in the Doghouse* の一部を見てみよう。Skippy がお得意の空想遊びでメキシコを訪れ、そこで様々な犬と出会う場面である（日本語訳と下線による強調は早川による）：

“I am El Skippito, the great sword fighter,” said Skippyjon Jones. (「僕はエル・スキピート。偉大な剣士さ」とスキッピージョン・ジョーンズ。)

Then the smallest of the small ones spoke up. [中略] (チビさんたちの中でも一番小さな犬が口を開きました。)

“Do you like rice and beans?” asked Pintolito. (「お前、米(ライス)と豆は好きか?」とピントリートが聞きます。)

“Sí, I love mice and beans,” said Skippito. (「Sí、ネズミ(マウス)と豆は大好きさ」)

とスキッピー。)

“He might be the dog of our dreams,” whispered Rosalita. (「もしかして、こいつが私たちの探してた夢の犬かも」ロザリータが囁きます。)

“Perhaps,” said Tia Mia. (「かもな」とティア・ミア。)

この場面で犬たちは、突然表れた奇妙な犬 (Skippy は実際には猫だが、犬たちはそのことに気付いていない) に対し、いろいろと「探り」を入れている。その一環として、Pintolito が、“Do you like ~?” というすでに児童に馴染みの表現を用いて、米と豆は好きかと尋ねる。ちなみに米と豆はメキシコの主食の一つである。この表現は、初めて出会った相手が自分たちの日常食を好きかどうか確認することによって、自分たちの仲間かどうか探る、という目的のために利用されている。Skippy は相手の意図を知ってか知らずか、スペイン語 (メキシコの公用語) で yes にあたる *sí* を用いて返答することで、彼らの信用を得ることに成功している。

このように、絵本の中では、言語表現がストーリーの中で登場人物の意図や目的に沿って巧みに利用され、その場の状況や登場人物のキャラクター設定などと有機的に絡み合っており、ことばの使い方を立体的に児童に教えてくれる。また、ある程度の量のまとまった会話の連続を聞くことで、“Do you like ~?” に対しては、教材に示された “Yes, I do. / No, I don’t.” だけでなく、“I love ~.” と答える選択肢もあることなど、より実用的な表現どうしのつながりも学ぶことができる。

余談だが、上記の抜粋部にはちょっとした言葉遊びも含まれている。Skippy は実際には猫なので、米 (ライス) と聞かれたのをうっかり自分の好物のネズミ (マウス) と聞き間違え、I love mice and beans. と返答している。しかしライスとマウスが韻を踏んでいるため、質問した犬の側も Skippy の間違いに気づかない。お互いの勘違いが重なって逆にやりとりがうまく成立してしまうという可笑しみを味わうこともできる。

このように、すでに慣れ親しんだ表現が絵本のストーリーに組み込まれることで、児童は、「何かをする」ためにことばを用いることを、登場人物たちを通して体験する。しかもその体験が児童にとって「楽しい」という、貴重なメリットもある。児童にとって親近感を抱かせる登場人物が繰り広げる起承転結のあるストーリーは、想像力をかきたてるような色鮮やかな絵と一緒に、児童をその活動に向かわせる強力な動機づけとなるだろう。現に、英語絵本を外国語活動に取り入れるという試みは既に数多く行われており、その実践記録や活動アイデア集なども多く出版されている (外山、宮下 2010; 外山、他 2010; リーパー 2011; 恵泉英語教育研究会 (KEES) 2014 などを参照のこと)。ここからは、こうした絵本の可能性を授業で最大限に生かすためには、どのような絵本を選ぶのがふさわしいかを検討したい。

### 2.3. 外国語活動で利用する絵本の条件

ここまで見たように、絵本は外国語活動での活用が大いに期待できるメディアであるが、特に、言語的にはどのような絵本がふさわしいといえるだろうか。本稿では、外国語活動に用いるべき絵本の条件を、以下の2点にまとめたい：

条件1. 使用される英語が、これまでに学んだ表現を多く取り入れていること

条件2. 英語だけで話が理解できること

条件1の根拠については、ここまでの議論で自明であろう。絵本の読み聞かせは、児童が既に知っている英語表現を目的に即して利用することを体験する場である。逆に、せっかくこれまで学んできた表現があまり出てこない、または新しい表現ばかりで構成されていて場面状況を理解できないようでは、効果は望めない。

条件2については、上記のような「児童が理解できない言語表現が多い」という問題を回避するため、例えば、一部を日本語にした読み聞かせも想定できる。本文を教師が日本語に訳して読み上げ、平易な台詞のみ英語で読む、とか、あるいは英語と交互に日本語の解説や訳を挟む、などの方法である。

しかし、実践的コミュニケーション能力の育成という観点から考えたとき、こうした工夫はかえって読み聞かせの効果を低める可能性がある。そもそも、日本語の助け、あるいは訳がある状況では、「意味を知りたいければ日本語を聞けばよい」ことになってしまい、英語を聞くことの「必要性・必然性」という、第1節に見たコミュニケーションの基本条件が崩れてしまう。

また、恵泉英語教育研究会（KEES）（2014）に興味深い指摘がある。そこでは、「日本語を介さないで英語を理解し、英語で何かを感じ、日本語とは異なる英語の世界を頭の中に描き、体験する（p6）」ことの重要性が示唆されている。その理由は以下のとおりである：

日本語を使って英語を理解するプロセスを鍛えても、英語を英語のまま即座に理解し、英語で言いたいことをすぐに表現できる実践的なコミュニケーション能力の育成にはつながりません。英語を英語で理解し、英語で考え、英語で表現するという、もっと直接的で自動化された情報処理システムの構築を強化しないかぎり、実際のコミュニケーションの場で使える英語力はなかなか育たないでしょう。（p10）

こうした配慮からも、外国語活動に取り入れる絵本は、なるべく英語だけで物語の内容をまるごと体験できるものになっていることが望まれる。

それでは、上記の2条件に適う絵本とはどのようなものか。次節では、この考察の出発点となるケース・スタディーとして、既にHi, friends! に教材として取り入れられている絵本が、この2条件をどの程度達成しているかを調査する。

### 3. *Hi, friends!* の分析：外国語活動での活用にあふさわしい絵本とは

第 1 節でいくつかの問題点を指摘した *Hi, friends!* だが、単元の一部に絵本を取り入れる試みは既に行っている。それは *Hi, friends!* 2 Lesson 7 で取り上げられている「桃太郎」である。*Hi, friends!* では、この物語をダイジェスト版にし、絵と、英語による登場人物の台詞のみでストーリーを再構成している。

#### 3.1. 既学習表現を取り入れているか

まず、*Hi, friends!* 内の「桃太郎」が、上記条件 1 をどの程度満たしているかを検証したい。*Hi, friends!* 1, 2 の各単元で導入される英語表現をまとめてみると、表 1 のようになる（表 1 にまとめたのは新出表現であり、新出単語は取り上げていない）。「桃太郎」絵本が導入されている単元は、網掛けで示した。

表 1：*Hi, friends!* で学ぶ表現（早川の調査による）

	単元名	導入される表現
<i>Hi, friends!</i> 1		
Lesson 1	Hello! 世界のいろいろな言葉で あいさつしよう	Hello. / Hi. / Goodbye. Nice to meet you. / Nice to meet you, too. What' your name? / My name is... Thank you.
Lesson 2	I'm happy. ジェスチャーをつけてあ いさつしよう	How are you? / I'm 形容詞. / And you? Good.
Lesson 3	How many? いろいろなものを数えよ う	How many 名詞? / 数詞 + 名詞 s.
Lesson 4	I like apples. 好きなものを伝えよう	I like/don't like 名詞. Do you like 名詞? / Yes, I do. / No, I don't. Thank you. / You're welcome.
Lesson 5	What do you like? 友だちにインタビューし よう	What do you like? / I like 名詞. What 名詞 do you like? Here you are. Wow, 形容詞 + 名詞!
Lesson 6	What do you want? アルファベットをさがそ う	What do you want? 名詞, please.
Lesson 7	What's this? クイズ大会をしよう	What's this? It's (a) 名詞.



Lesson 8	I study Japanese. 「夢の時間割」を作ろう	I study 教科 on 曜日. What do you study on 曜日?
Lesson 9	What would you like? ランチメニューを作ろう	What would you like? I'd like (a) 名詞. OK, 名詞. / 名詞. OK. Yes, please. / I'm from 国名.
<i>Hi, friends! 2</i>		
Lesson 1	Do you like "a"? アルファベットクイズを作ろう	Do you have 名詞? Yes, I do. / No, I don't.
Lesson 2	When is your birthday? 友だちの誕生日を調べよう	When is your birthday? / My birthday is 日にち. 行事・誕生日 is in 月名 (, too). I'm 名前.
Lesson 3	I can swim. できることを紹介しよう	I can / can't 動詞 (または play スポーツ / 楽器). Can you 動詞 (または play スポーツ / 楽器)? Yes, I can. / No, I can't. I like / don't like 動名詞. Who am I? / I'm 名前. That's great! / Very nice. / Me, too.
Lesson 4	Turn right. 道案内をしよう	Where is (the) 名詞? Go straight. / Turn right / left. / Let's go! Here is 建物.
Lesson 5	Let's go to Italy. 友だちを旅行にさそおう	Where do you want to go? / I want to go to 国名. This is 建造物 in 国名. They are / It's in 国名. Let's go to 国名. 国名 is a 形容詞 country.
Lesson 6	What time do you get up? 1日の生活を紹介しよう	I [get up (etc.)] at 時刻. What time do you [go to bed (etc.)]? What time is it in 地名? / It's 時刻.
Lesson 7	We are good friends. オリジナルの物語を作ろう	—
Lesson 8	What do you want to be? 「夢宣言」をしよう	What do you want to be? / I want to be (a) 職業. I want 名詞. Nice / Good / Fantastic 名詞.

表1中の表現を、用いられる文法事項によって整理すると次のようになる：

- 法
  - ・ 叙述法
  - ・ 疑問法 : Yes/No 疑問文、疑問詞 (5W1H) および疑問詞 + 名詞 (例 : what sport, what animal, what time など) で始まる疑問文
  - ・ 命令法 : Let's で始まる命令文を含む \* Be 動詞を用いた命令文は未出
- 文型
  - ・ 第 I 文型 (例 : Here is 名詞、I'm from 国名、名詞 is in 国名)
  - ・ 第 II 文型 (主語 + 述語 + 補語)
  - ・ 第 III 文型 (主語 + 述語 + 目的語)
- 述語を構成する動詞 (句) の種類
  - ・ Be 動詞
  - ・ 一般動詞
  - ・ 助動詞 (can) + 一般動詞 \* 助動詞 + Be 動詞のパターンは未出
- 極性
  - ・ 肯定文 (例 : I am / I like / I can)
  - ・ 否定文 (例 : (I'm not) / I don't like / I can't)
- 時制
  - 現在時制のみ
- 名詞・代名詞の種類
  - ・ 普通名詞の単・複数形
  - ・ 人称代名詞 (I, you, we, it など)
  - ・ 指示代名詞 (this, that など)
- 名詞句の構造
  - ・ 名詞のみ
  - ・ a / the + 名詞
  - ・ (a / the +) 形容詞 + 名詞 (例 : a nice country)
  - ・ (a / the +) 名詞 + 前置詞句 (例 : the Great Wall in China)
- 不定詞の名詞的用法、動名詞
  - ・ 目的語としての不定詞の名詞的用法 (例 : I want to be a singer.)
  - ・ 目的語としての動名詞 (例 : I like swimming.)
- 様々な挨拶・慣用表現
  - Hello. / Hi. / Goodbye. / Nice to meet you. / Good. / Thank you. / You're welcome.
  - / Here you are. / ~, please. / Yes, please. / OK. / That's great! / Very nice. / Me, too. / Nice [Good / Fantastic] + 名詞.

このように列挙してみると、表現の取得が目的ではない *Hi, friends!* でも、基礎的な英文法のかなりの部分を網羅する多様な表現が取り入れられていることが分かる。

では、*Hi, friends!* 2. pp.28-36 の「桃太郎」を構成する英語表現は、これらの既習表現とどの程度重なり合うのか。以下に、表2として全テキストの分析を載せる。「テキスト」欄が *Hi, friends!* に載っている英語テキストである（分析をしやすいように、節（clause）の単位に分けて節番号を付した。テキストの節への分節のしかたについては、英語の場合は Halliday (1994)、日本語の場合は早川、他 (2011) を参照のこと）。左端は、そのテキストが誰の台詞かを表している。「形式」欄はテキスト各節が用いている文法形式、「既習類似表現」欄は、*Hi, friends!* に登場する、その文法形式を用いた類似表現である。類似表現に付された記号は、その表現が登場した単元を示しており、例えば「H1L4」は、*Hi, friends!* 1 の Lesson 4 で当該表現が導入されたことを表す。「初出」は、今までの単元に類似表現がなく、その節に用いられている文法形式が「桃太郎」絵本の中で初めて出てきたことを表す。なお、同じ「初出」形式が「桃太郎」中に複数回登場する場合も、「これまでの単元では習っていない」という意味で、2回目以降も「初出」とした。

表2：Hi, friends! 2「桃太郎」英語絵本の分析

	テキスト	形式	既習類似表現
おばあさん (以下「婆」)	1. Take care. (気を付けて)	命令文	H1L4 Go straight.
	2. See you. (それじゃあ)	挨拶・慣用句	初出
おじいさん (以下「爺」)	3. See you later. (それじゃあ、また)	挨拶・慣用句	初出
	4. What's that? (あれは何?)	WH 疑問文	H1L7 What's this?
婆	5. Wow! A big peach! (まあ、大きな桃!)	形容詞 + 名詞	H1L5 Wow, nice T-shirt!
	6. A peach is coming! (大きな桃が来るわ!)	第I文型 / 現在進行形	初出
爺	7. Look! (見ろ!)	一般動詞の命令文	H1L4 Go straight.
	8. A boy! A little boy! (男の子だ! 男の赤ん坊だ!)	形容詞 + 名詞	H1L5 Wow, nice T-shirt!
婆	9. Yes, yes. (そうです、そうです。)	挨拶	H1L4 Yes.
	10. A boy from the peach! (桃から男の子が!)	名詞 + 前置詞句	H2L5 the Great Wall in China

桃太郎 (以下「桃」)	11. Hello, Grandpa and Grandma. (こんにちは、おじいさん、おばあさん)	挨拶・慣用句	H1L1 Hello, Maria.
爺	12. Momotaro is a good boy. (桃太郎はいい子だ)	第 II 文型	H2L5 France is a nice country.
婆	13. Yes, very good and cute. (そう、とてもいい子で可愛いわ)	挨拶	H2L3 Very nice. の応用 * 形容詞を and で列挙するパターンは初出
赤鬼	14. Arrrgh! I'm strong! (ガオー!俺は強いぞ!)	第 II 文型	H1L2 I'm happy.
青鬼	15. Arrrgh! I'm strong, too. (ガオー!俺も強いぞ!)	第 II 文型 / , too.	H1L2 I'm happy. と H2L2 My grandfather's birthday is in June, too. の組み合わせ
赤鬼 & 青鬼	16. We are strong! (俺たちは強いぞ!)	第 II 文型	H1L2 I'm happy. の応用 (主語と述語の呼応を含む)
桃	17. I'm going to Onigashima. (僕は鬼が島へ行きます)	第 I 文型 / 現在進行形	初出
爺	18. Very dangerous. (とても危険だ)	挨拶・慣用句	H2L3 Very nice.
婆	19. Very dangerous. (とても危険よ)	挨拶・慣用句	H2L3 Very nice.
	20. Please stay here. (ここにいて)	Please + 一般動詞の命令文	H1L4 Go straight. と H1L6 The "C" card, please. の組み合わせ
爺	21. Please stay here. (ここにいてくれ)	Please + 一般動詞の命令文	H1L4 Go straight. と H1L6 The "C" card, please. の組み合わせ
	22. You are strong. (お前は強い)	第 II 文型	H1L2 I'm happy. の応用 (主語と述語の呼応を含む)
婆	23. Yes, you are strong and brave! (そう、お前は強くて勇敢!)	第 II 文型	H1L2 I'm happy. の応用 (主語と述語の呼応を含む) * 形容詞を and で列挙するパターンは初出
桃	24. Yes, I'm strong and brave! (そう、僕は強くて勇敢だ!)	第 II 文型	H1L2 I'm happy. * 形容詞を and で列挙するパターンは初出

爺	25. A flag. (旗 (のぼり) だ)	名詞句	H1L7 a shoe
	26. Here you are. (どうぞ)	挨拶・慣用句	H1L5 Here you are.
婆	27. Kibidango. (キビダンゴよ)	名詞句	H1L4 milk
	28. Here you are. (どうぞ)	挨拶・慣用句	H1L5 Here you are.
桃	29. Thank you. (ありがとう)	挨拶・慣用句	H1L1 Thank you.
	30. Thank you very much, Grandpa and Grandma. (本当にありがとう、おじいさん、おばあさん)	挨拶	H1L1 Thank you. の応用 * very much がつくのは初出
	31. I'm strong! (僕は強い!)	第II文型	H1L2 I'm happy.
	32. I'm brave! (僕は勇敢だ!)	第II文型	H1L2 I'm happy.
	33. Don't worry. (心配しないで)	否定の一般動詞の命令文	H1L4 Go straight. と H1L4 I don't like spiders. の組み合わせ
婆	34. Take care! (気をつけて!)	一般動詞の命令文	H1L4 Go straight.
爺	35. Take care! (気をつけて!)	一般動詞の命令文	H1L4 Go straight.
桃	36. See you soon. (行ってきます)	挨拶・慣用句	初出
*			
猿	37. Hello, Momotaro. (こんにちは、桃太郎)	挨拶・慣用句	H1L1 Hello, Maria.
桃	38. Hi, Monkey [Dog / Bird] . (やあ、猿/犬/雉さん)	挨拶・慣用句	H1L1 Hi, ...
	39. How are you? (元気かい?)	WH 疑問文	H1L2 How are you?
猿	40. I'm good. (元気だよ)	第II文型	H1L2 I'm happy.
	41. How are you? (君は元気かい?)	WH 疑問文	H1L2 How are you?
桃	42. I'm very fine. (とても元気だよ)	第II文型	H1L2 I'm happy.
猿	43. What's this? (これは何?)	WH 疑問文	H1L7 What's this?

桃	44. It's <i>kibidango</i> . (キビダ ンゴだよ)	第 II 文型	H1L7 It's a mat.
猿	45. A <i>kibidango</i> , please. (一 つください)	名詞, please.	H1L6 The "C" card, please.
桃	46. OK. (いいよ)	挨拶・慣用句	H1L9 OK.
	47. Here you are. (どうぞ)	挨拶・慣用句	H1L5 Here you are.
猿	48. Thank you. (ありがと う)	挨拶・慣用句	H1L1 Thank you.
桃	49. You're welcome. (どう いたしまして)	挨拶・慣用句	H1L4 You're welcome.
	50. We are good friends. (僕 たち友だちだよ)	第 II 文型	H2L5 France is a nice country. の応用 (主語と述語 の呼応を含む)
	51. Let's go to onigashima. (鬼が島へ行こう)	Let's の 命 令 文	H2L5 Let's go to Italy.
猿	52. OK. (いいよ)	挨拶・慣用句	H1L9 OK.
	53. I'm strong and brave. (僕 は強くて勇敢だ)	第 II 文型	H1L2 I'm happy.
	54. Let's go! (行こう!)	Let's の 命 令 文	H2L4 Let's go.
**			
*~*** 猿 (Monkey) を犬 (Dog)、雉 (Bird) に変えてくり返し			
桃	55. Look! (見て!)	一般動詞の命 令文	H1L4 Go straight.
	56. Onigashima! (鬼が島 だ!)	名詞句	
猿	57. Oh, yes. (ああ、そうだ)	挨拶・慣用句	H1L4 Yes.
	58. Onigashima. (鬼が島だ)	名詞句	
犬	59. We are strong. (僕たち は強い)	第 II 文型	H1L2 I'm happy. の応用 (主 語と述語の呼応を含む)
雉	60. We are brave! (僕たち は勇敢だ!)	第 II 文型	H1L2 I'm happy. の応用 (主 語と述語の呼応を含む)
桃	61. Yes, we are strong and brave. (そう、僕たちは 強くて勇敢だ)	第 II 文型	H1L2 I'm happy. の応用 (主 語と述語の呼応を含む)
	62. And we are good friends. (そして僕たち は友だちだ)	第 II 文型	H2L5 France is a nice country. の応用 (主語と述語 の呼応を含む)

桃・猿・犬・雉	63. We are strong and brave! (僕たちは強くて勇敢だ!)	第II文型	H1L2 I'm happy. の応用 (主語と述語の呼応を含む)
鬼たち	64. We are strong! (俺たちは強いぞ!)	第II文型	H1L2 I'm happy. の応用 (主語と述語の呼応を含む)
	65. Sorry. Sorry. (すみません、すみません)	挨拶・慣用句	初出
	66. We are sorry. (申し訳ありません)	挨拶・慣用句	初出
桃	67. That's OK. (いいんだよ)	挨拶・慣用句	初出
	68. Be good! (いい子にして!)	Be動詞の命令文	初出
	69. We are good friends! (僕たちは友だちだ!)	第II文型	H2L5 France is a nice country. の応用 (主語と述語の呼応を含む)
鬼たち	70. Yes, yes, we are good friends. (そう、そう、俺たちは友だちだ)	第II文型	H2L5 France is a nice country. の応用 (主語と述語の呼応を含む)
桃	71. Grandpa and Grandma, we are here. (おじいさん、おばあさん、ただいま)	第I文型	H1L9 I'm from America. の応用 (主語と述語の呼応を含む) * 補語が here のパターンは初出
爺	72. Oh, Momotaro. (ああ、桃太郎)	挨拶・慣用句	H2L3 Oh, ...
	73. My good boy. (よくやった)	形容詞 + 名詞	H1L5 Wow, nice T-shirt! の応用
	74. We are happy. (私たちは嬉しいよ)	第II文型	H1L2 I'm happy. の応用 (主語と述語の呼応を含む)
婆	75. Oh, Momotaro. (ああ、桃太郎)	挨拶・慣用句	H2L3 Oh, ...
	76. My brave boy. (立派ね)	所有代名詞 + 形容詞 + 名詞	初出
	77. We are happy. (私たちは嬉しいわ)	第II文型	H1L2 I'm happy. の応用 (主語と述語の呼応を含む)
爺・婆・動物たち・村人たち	78. We are proud of you! (お前が誇らしいよ!)	第II文型	H1L2 I'm happy. の応用 (主語と述語の呼応を含む) * be proud of ... の慣用表現は初出

全員	79. We are very happy! (めでたしめでたし!)	第 II 文型	H1L2 I'm happy. と H2L3 Very nice. の組み合わせ (主語と述語の呼応を含む)
----	------------------------------------	---------	--

表 2 において、テキスト中の文法形式が既に学習済みといえるかどうかの基準として、言語学でいう「統語的關係 (syntagmatic)」と「系列的關係 (paradigmatic)」の概念を用いた。節の構成要素を、節内の他の要素との関係でとらえたのが統語的關係、どの要素と言い換えることができるかという観点からとらえたのが系列的關係である。例えば、I am a student. という文において、I と am は主語と述語という関係で結びついており、a student はその補語という関係にある。I, am, a student はそれぞれこうした統語的關係でつながっている。一方、見方を変えると、I am a student. の a student の部分は、ほかに a teacher, a doctor, his mother などの名詞句と入れ替えても文法的には問題ない。このような入れ替え可能の関係を系列的關係という。同様に、I と you も系列的關係にあるため、主語を you に入れ替えることもできるが、ただし I と am が統語的に主語 - 述語の関係でつながっているため、I を you に変えると、am は you に呼応するため are と形を変えなければならない。これは統語的關係である。本稿では、テキストの当該節と、既に導入された文例との間に、要素の系列的入れ替えのみが起こっている場合は、既出の要素と類似の表現とみなした (例: I am a student. と I am a teacher. の 2 文は類似表現と分析する)。

この基準により、当該節で使用されている文法形式が完全に「初出」の場合と、既に用いられた表現どうしを組み合わせた、いわば「応用形」になっている場合とを、表 2 中では網掛けで示した。例えば、節 4 の What's that? は、既出の What's this? と統語的構造はまったく同じで、that と this が系列的に置き換わっただけなので、既出文例と類似であり、単語の知識があれば児童は理解できる。一方、第 6 節の A peach is coming! は、第 I 文型という形は既出であるが、述語の時制が今まで使われたことのない進行形になっている。そのため、述語動詞の前に be 動詞を挿入し、それに伴い動詞が ing 形になるという統語的变化を伴い、その形式について学んだことのない児童には理解不可能なため、「初出」とした。

同様に、第 16 節 We are strong! は I'm happy. の I を we に、am を are に、happy を strong に置き換えたのみなので、系列的变化だけのように見えるが、実際には、主語が we だと述語が are に変わるという呼応の関係 (= 統語的關係) の理解を含むため、応用形とした。また、節 33 の Don't worry. という否定の一般動詞の命令文については、命令文 (Go straight) や否定文 (I don't like spiders.) は既に別々に導入されているが、その 2 つが同時に用いられるパターンとしては初出なので、「組み合わせ」と表記した。

このような基準から改めて表 2 を見ると、全 79 節 (実際のテキストは繰り返しを含む



ので、これより節数が多い)のうち、4割以上にあたる36節で初出または応用的な表現が用いられている。これは、第二言語習得の基本となる「言語習得におけるインプットは、学習者の言語レベルより少しだけ難しいインプット ( $i + 1$ ) とする」ことを求めたいいわゆるインプット仮説 (Krashen 1982) に反しており、教員の解説なしで内容を理解するのはかなり難しいことが予想される。

このように、せっかく絵本を単元の一部に取り入れた *Hi, friends!* であるが、「慣れ親しんだ」表現を実際のコンテキストの中で使用してみせるといふ、絵本に期待されるメリットをあまり生かしているとは言えない状況が明らかになった。

### 3.2. 英語だけでストーリーを構築しているか

前節では、*Hi, friends!* の「桃太郎」絵本のテキストを、「条件1. 使用される英語が、これまでに学んだ表現を多く取り入れている」かどうかの観点から分析した。その結果、既出の表現以外の割合が多すぎ、児童がスムーズに内容を理解して絵本の世界を体験するには難しすぎるのが、文法形式の分析から明らかになった。続いて本節では、「条件2. 英語だけで話が理解できる」かどうかの観点を移す。すなわち、もし児童がそれらの初出表現を理解できたとして、意味内容的に、「桃太郎」の英語はストーリーを十分に構築しているかを検討する。

表2のテキスト部を読むと分かるように、*Hi, friends!* の「桃太郎」は、本文(いわゆる「地の文」)がなく、台詞だけで構成されるダイジェスト版になっており、台詞の英語を聞いただけで話を理解することは難しい。もちろん、絵本は文と絵が一緒になってストーリーを構成するメディアであるため、テキストだけを取り上げて議論するのは不適切である。とはいえ、分析テキストは、たとえ絵が一緒になっても、十分に物語の世界を構築しているとは言い難い。

例えば冒頭の場面、テキストとしては、おばあさんの台詞“Take care. See you.”(気を付けて。それじゃあ)と、おじいさんの台詞“See you later.”(それじゃあ、また)があるのみである。絵としては、二人の家と思われる茅葺の小屋の前で、おばあさんが木桶、おじいさんが杖を片手に手を振りあっている場面を描いている。表2に見るように、See you. (節2)と See you later. (節3)はそれぞれ新出表現であるため、児童には意味が分からない可能性があるが、絵で二人が手を振りあっていることから、別れの表現であることは推測できるかもしれない。しかし、二人がどのような関係性なのか(それ以前に、この二人は誰なのか?)、別れてそれぞれどこへ行くのか、これは永劫的な別れなのか、それとも一時的にどこかへ出かける場面なのか、すべて明らかにされていない。要するに、この英語絵本版「桃太郎」は、児童が既に「桃太郎」の物語を知っていることを前提としており、「英語でストーリーを理解する」「英語で物語世界を体験する」というよりは、「今の場面が、既に知っている物語のどの部分に相当するかを、英語と絵から推測する」活動

になってしまっている。これでは、「既に慣れ親しんだ表現を目的のために使う」というよりは、「既に日本語で知っている表現を英語で言うとうどうなるか」を確認するという、外山、他(2010:36)の言う「言語ベース」の活動になってしまう。

他の場面もほぼ同様であるが、前提となる知識抜きでは特にストーリー展開が分かりづらい部分として、第5～7場面(節14～29)を見てみたい。第5場面は、赤い鬼と青い鬼が人々の家を壊している様子、および、家を壊された人々が鬼の背後で怯えている様子が絵で提示され、テキストとしては、赤鬼と青鬼の台詞“Arrrgh! I'm strong!”(ガオー！俺は強いぞ！；節14)や“We are strong!”(俺たちは強いぞ！；節16)が読み上げられるのみである。続く第6場面は家の中で、何かを決意したような表情の桃太郎が、“I'm going to Onigashima.”(僕は鬼が島へ行きます；節17)と言い、その横でおじいさんとおばあさんが、心配そうな表情で“Very dangerous.”(とても危険だ；節18, 19)、“Please stay here.”(ここにいて；節20, 21)と言っている。ここでは、第5場面の鬼の行動と第6場面の桃太郎の決心の間にある因果関係の説明が完全に省略されているため、「桃太郎が鬼が島へ行くのは、鬼を退治するため。そして鬼を退治するのは、鬼が悪さをして人々が困っているため」という関係を理解するには、やはり児童が既にもっている知識に頼らざるを得ない。続く第7場面では、さっきまで“Please stay here.”と言っていたおじいさんとおばあさんが、一転、“You are strong.”(お前は強い；節22)、“Yes, you are strong and brave!”(そう、お前は強くて勇敢！；節23)と言いながら、のぼりやキビダンゴを用意して桃太郎の出発準備を整えている。場面6から7の間に一体どんな展開があってこのような心境の変化が訪れたのか、英語を聞いても絵を見ても、見当がつかない。

このように、今回分析した「桃太郎」は、単元の冒頭に「まとまった英語の話を聞いて、内容がわかり、場面に合ったセリフを言う」という目標を掲げてはいるが、実際には、「まとまった英語を聞いて、内容がわかるようにはなっていない。まして、「日本語を介さないで英語を理解し、英語で何かを感じ、日本語とは異なる英語の世界を頭の中に描き、体験する」(恵泉英語教育研究会(KEES)2014:6)という目的は達成しがたいといえる。

#### 4. まとめ：よりよい絵本を探して

第2節に見たように、絵本の活用は外国語活動に様々なメリットをもたらすと考えられ、*Hi, friends!* の、英語絵本を取り入れるという試み自体は高く評価すべきと考えられる。ただし、英語を学び始めたばかりの児童を対象にする場合、どんな絵本でも良いわけではない。本稿では、

条件1. 使用される英語が、これまでに学んだ表現を多く取り入れていること

条件2. 英語だけで話が理解できること

という2条件に照らして、*Hi, friends!* 収録の「桃太郎」絵本が、「既に慣れ親しんだ表現を目的のために用いる」教材としては不適切な点があることを確認した。

要点をまとめると、条件1に関して、*Hi, friends!* の「桃太郎」は、新出表現や、既習表現の応用的表現の割合が多すぎ（全体の4割以上）、児童が文脈や絵を手掛かりに意味を推測できる範囲を超えている。条件2に関して、分析テキストは、児童が既にもっている桃太郎のあらすじの知識に頼りすぎていて、省略部分が多く、「英語で物語を理解し、英語で物語世界を体験する」ための材料にはならない。

こうした問題点を踏まえると、逆に、外国語活動で用いるのにふさわしい絵本とは何かが見えてくる。つまり、「桃太郎」のように比較的複雑な筋をもち、時代設定が現代ではない（そのため、まともに英訳すると「芝刈り」「鬼」など児童に馴染みのない単語が多く出てきてしまう）物語を題材にして、それを児童に理解可能な英語で再構成しようとすると、どうしても内容が省略的になるばかりでなく、結局は使用する言語表現も、既習表現の枠を超えてしまうことになりがちなのである。おそらく、家庭や学校生活などもっと日常的な場を舞台に繰り広げられる単純なストーリーで、しかも、単純であっても児童にとって知的に興味深い話が、教材としてよりふさわしいのだろう。

今回は、既存の教材である *Hi, friends!* で利用されている絵本を分析し、問題点を明らかにすることが中心となったが、今後は、今回明らかになった問題点をもとに、より有用な絵本を探したり、それをどのように利用することが効果的かについて研究を続けたい。

## 参考文献

- Halliday, M.A.K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar*. 2nd ed. Edward Arnold, London.
- Krashen, S. (1982) . *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. Oxford : Pergamon.
- 恵泉英語教育研究会 (KEES) 編 村岡 有香、須藤 桂子、飯窪 実香 著 (2014) 『外国語活動で使える！読み聞かせ絵本&活動アイデア』(成功する小学校英語シリーズ) 明治図書
- 瀬田 貞二 (1985) 『絵本論——瀬田貞二子どもの本評論集——』 東京：福音館書店
- 高島 英幸 (2014) 『児童が創る 課題解決型外国語活動と英語教育の実践』 高陵社書店
- 外山 節子 監修・著、宮下 いづみ 著 (2010) 『音のある音声絵本ガイド』 コスモピア株式会社
- 外山 節子 監修・著、入江 智子、坂井 邦晃、佐藤 貴子、渋谷 徹、藤澤 京美 著 (2010) 『小学校の外国語活動で成果を上げる 指導案付き 英語の絵本活用マニュアル』 コスモピア株式会社
- 直山 木綿子 (2013) 『小学校外国語活動のあり方と“Hi, friends!”の活用』 東京書籍
- 直山 木綿子 (2014) 『小学校外国語活動のツボ』 教育出版
- 早川 知江、佐野大樹、水澤祐美子、伊藤紀子 (2011) 「機能文法における節境界の問題と認定基準の提案」『機能言語学研究』第6巻 pp.17-58. 日本機能言語学会
- 早川 知江 (2014) 「『外国語活動』と他教科の教材共有の可能性——国語教材の英語原書を用いた活動——」『名古屋芸術大学教職センター紀要』第1号 p101-120.
- 樋口 忠彦、加賀田 哲也、泉 恵美子、衣笠 知子 編著 (2013) 『小学校英語教育法入門』 研究社
- 松居 直 (1973) 『絵本とは何か』 東京：日本エディターズスクール出版部
- 文部科学省 (2008) 「小学校学習指導要領」([http://www.mext.go.jp/component/\\_a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2010/11/29/syo.pdf](http://www.mext.go.jp/component/_a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2010/11/29/syo.pdf))

文部科学省 (2013) *Hi, friends! 1, 2*.

文部科学省 (2013) 『*Hi, friends! 1, 2* 指導編』

リーパー・すみ子 (2011) 『アメリカの小学校では絵本で英語を教えている』 径書房